

平成22年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520312

研究課題名（和文） ハンガリー語における空間移動表現と動詞接頭辞の役割

研究課題名（英文） Space expressions and the role of verbal prefixes in Hungarian

研究代表者

早稲田 みか（WASEDA MIKA）

大阪大学・世界言語研究センター・教授

研究者番号：30219448

研究成果の概要（和文）：ハンガリー語の空間移動表現は、動詞の他に、動詞接頭辞、副詞、後置詞、格接尾辞が使用され、ハンガリー語は移動の経路を動詞の付随要素で表わすタイプの言語であること、経路表現においては動詞接頭辞が重要な役割を担っており、ほとんどの動詞接頭辞が、移動の方向という基本的意味の他に、完了アスペクト機能を有していること、この完了アスペクト機能は、移動表現における経路の終端焦点化によって説明できることがわかった。

研究成果の概要（英文）：In Hungarian the motion expressions are described by satellite elements such as verbal prefixes, adverbs, postpositions and case suffixes other than verbs. It is categorized as a so-called satellite-framed language. The verbal prefixes play the most important role in the description of path. The most of the verbal prefixes have a perfectivizing function besides indicating direction of the process. This function is explained by focusing the attention to the final stage, that is the completion of the process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	750,000	4,150,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：その他の言語学、ハンガリー語、動詞接頭辞

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、ハンガリー語において「動詞接頭辞」と呼ばれている文法カテゴリーに属する要素の意味と機能を明確にすることにあった。この背景には、以下の理由があった。

動詞接頭辞は、意味的な観点から見て、移動の方向という基本的な意味の他に、完了アスペクトを表わすなど、複雑な意味構造を有するきわめて多義的な要素である。ほとんどの動詞接頭辞は、移動を表わす動詞に接続して、「上へ」「下へ」「中へ」「外へ」といった移動の方向を表わす機能を有しているが、方向以外にもさまざまな意味を付加し、元の動詞（基動詞）の意味からはまったく予想できない意味を生成する場合もある。また、移動を表わさない動詞に接続して、移動を表わす動詞を派生することもある。さらにほとんどの動詞接頭辞は、完了アスペクトを付加する機能も有している。

動詞接頭辞は、統語的な観点から見ても、接辞としてふるまうこともあれば、独立した語としてふるまうこともあるなど、非常に複雑な働きをする要素である。多くの場合、動詞の前に接続して、正書法上、一語として書かれるが、統語的条件によっては、基動詞から分離し、前方や後方に移動するという性質を持っている。

以上のように、動詞接頭辞は記述がきわめて困難で、定義もあいまいであり、学習の観点からも習得がきわめて難しい文法要素である。このような動詞接頭辞の複雑な多義的構造を明らかにし、なんらかの統一的な説明を与えることができれば、ハンガリー語の記述文法や、ハンガリー語の辞書記述、さらにはハンガリー語教育にも役立つであろうこ

とが予測できた。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、ハンガリー語において、空間移動表現がどのような言語手段によって実現されているのかを検討すること、空間移動表現においてもっとも重要な役割を担っている「動詞接頭辞」と呼ばれる文法カテゴリーに属する要素の意味と機能を明確にすることであった。

具体的な目的は以下のとおりである。

(1) ハンガリー語において空間移動表現がどのような言語要素によって表現されているのかを明らかにする。

(2) 動詞接頭辞付き動詞と基動詞の意味と用法の違いを比較検討することによって、動詞接頭辞の意味機能を明らかにする。

(3) 基本的な意味である空間的用法（基本的スキーマ）が抽象的用法に意味拡張されるときに、どのようなメトニミーやメタファーが機能しているかを明らかにする。

(4) 研究の結果をハンガリー語教育に応用する。すなわち、ハンガリー語学習者にとって習得がきわめて困難な動詞接頭辞の効果的な教育法を考察する。

3. 研究の方法

(1) 空間移動表現に関わる要素の特定

ハンガリー語において空間移動表現がどのような言語手段によってなされているのかを、以下の方法で検討した。

① 分析のためのテキストとしてアラン・アレクサンダー・ミルン『クマのプーさん』のハンガリー語訳の一部を選定した。

② 空間移動表現に関わる部分を抽出して、どのような要素が使用されているかを検討

した。

(2) 動詞接頭辞の分析

動詞接頭辞付き動詞と付いていない基動詞の意味と用法の違いを明らかにし、動詞接頭辞の意味と機能を分析するために以下の作業を行った。

①空間移動表現に深いかかわりをもつ動詞接頭辞 (be, ki, fel, le, meg, el) を選定した。

②それぞれの動詞接頭辞の機能について、ハンガリー科学アカデミー言語学研究所のハンガリー語コーパスを使用して、例文を収集し、意味用法を分類した。

③「中へ」という基本的意味を有する動詞接頭辞 be をとりあげて、その意味機能を考察し、多義的カテゴリーの構造の記述を行った。

④「外へ」という基本的意味を有する動詞接頭辞 ki について、その意味構造を語彙概念構造(LCS)を使って記述し、LCSによっては記述できない意味の違いについて、視点の移動や、イメージスキーマとメタファーやメトニミーによる意味拡張の観点から分析を試みた。

⑤動詞接頭辞がもつ完了アスペクト機能について文法化および構文変化の観点から考察した。

4. 研究成果

(1)ハンガリー語において空間移動表現がどのような言語手段によって実現されているのかを検討した結果、動詞以外には、動詞接頭辞、副詞、後置詞、格接尾辞が使用されること、動詞接頭辞は経路表現において大きな役割を果たしていることを確認した。

一般的に、移動の経路を動詞で表わすか、動詞の付随要素で表わすかによって、前者は動詞枠付け言語、後者は付随要素枠付け言語と呼ばれているが、ハンガリー語は、この分

類に従えば、付随要素枠付け言語に分類されることが確認された。

(2)代表的な動詞接頭辞 (be, ki, fel, le, meg, el) の使用例を収集し、ある程度の意味記述を行った。ほとんどの動詞接頭辞が、移動の方向という基本的な意味のほかにも、完了アスペクト機能を持っていることがわかった。

この完了アスペクト機能について、認知意味論の観点から分析を試みた。その結果、完了アスペクト機能は、移動表現における経路の終端焦点化によって説明できることがわかった。

完了アスペクトを表す動詞接頭辞 meg と el について意味分析を行い、微妙なニュアンスの違いは、文法化によって背景化された経路が関与しているのではないかという内容の研究発表をハンガリーのデブレツェンで開催された国際ハンガリー学会で行った。

(3)動詞接頭辞 ki を取り上げて、その意味構造を分析した。語彙概念構造(LCS)を使って記述した結果、動詞接頭辞がつくことによって、基体動詞の語彙概念構造に変更が加えられ、「外に存在するようになる」という移動の結果状態が付加されると説明できることがわかった。しかし、ki の持つ多義性については、語彙概念構造の違いによっては説明できないことも同時に明らかになった。多義的な意味については、視点の移動や、イメージスキーマとメタファーやメトニミーによる意味拡張の観点からの記述を試みた。

(4)動詞接頭辞がもつ完了アスペクト機能について文法化および構文変化の観点から考察した結果、以下のような知見が得られた。

①使用頻度の高い主な動詞接頭辞はど

れも元々、方向を表わす副詞から派生したものである。

②主として完了アスペクトを表わす動詞接頭辞 *meg* は、もっとも文法化の程度が高いと考えられる。

③動詞接頭辞を通時的にみると、文法化と語彙化のふたつの現象が観察される。

④文法化は移動経路の終端焦点化と構文変化(対格化)によってもたらされたと考えられる。

⑤語彙化はメタファーやメトニミーが関連している。

⑥動詞接頭辞は、移動そのものを表わさないが、移動の様態を含意する動詞に接続して、移動動詞を派生させる。

⑦動詞接頭辞は、自動詞を他動詞に変化させ、これにより生じる対格は動作が全体に及ぶという全体解釈を受ける。

(5)研究成果をハンガリー語教育に応用する可能性について検討した。動詞接頭辞の多義的構造は辞書記述に役立てることができる。また、一見まったく異なる意味用法はメタファーやメトニミーによる意味拡張によって説明できることから、これらを関連づけて教えることで、教育効果も期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 原千晶、江口清子、早稲田みか「ハンガリー語動詞接頭辞 *ki-* の意味構造」、『ウラリカ』、15号、2010年(近刊)、査読有

② Waseda Mika “Magyar nyelvoktatás Japánban”, Farkas Ildikó, Szerdahely István, Umemura Yuko, Wintermantel Péter

(eds) *Tanulmányok a magyar-japán kapcsolat történetéből*, 508-510, 2009. Hungary, Budapest, ELTE Eötvös Kiadó. 査読無

③ Waseda Mika “Esprimo de movigo en Esperanto, la hungara kaj japana lingvoj. (Motion expressions in Esperanto, Hungarian and Japanese) “ Ilona Koutny (ed) *Abunda fonto, Memorlibro omage al Prof. István Szerdahelyi*, 222-227, 2009. Poland, Poznan, ProDruk & Steleto. 査読無

④ Waseda Mika “Magyaroktatás Japánban” *THL2* (Magyar nyelv és kultúra tanításának szakfolyóirata, Journal of Teaching Hungarian as a 2nd Language and Hungarian Culture), 48-50, 2008, Hungary, Budapest, Balassi Intézet. 査読無

⑤ Waseda Mika “Mit lehet megvenni? A meg igekötő pragmatikai szempontból”, *Nyelv, Nemzet, Identitás*, 295-300, 2007, Hungary, Debrecen University. 査読無

[学会発表] (計3件)

① 早稲田みか「ハンガリー語における動詞接頭辞の文法化」、類型論研究会、2008年11月12日、京都大学(京都府)

② 原千晶、江口清子、早稲田みか「ハンガリー語動詞接頭辞 *ki-* の意味構造」、第35回ウラル学会、2008年7月5日、名古屋大学(愛知県)

③ Waseda Mika “Mit lehet megvenni? A

meg igekötő használatáról pragmatikai szempontból”, VI. Nemzetközi Hungarológiai Kongresszus Debrecen, 2006. Aug. 23-26. Hungary, Debrecen, Debrecen University.

〔図書〕（計2件）

① 早稲田みか「ラテン文字 ハンガリー語」、町田和彦編『図説世界の文字とことば』、44-45、2009年、河出書房新社

② 早稲田みか「ハンガリー語」、梶茂樹、中島由美、林徹編『事典世界のことば141』、342-345、2009年、大修館書店

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早稲田 みか (WASEDA MIKA)
大阪大学・世界言語研究センター・教授
研究者番号：30219448

(2) 研究分担者

なし